

## 子どもの叱り方について

川 島 眞

A report on the way of scolding children

KAWASHIMA Makoto

### Abstract

In this study, in order to explore how to scold the children effectively, research for students was conducted. 170 university students (junior college students were included) scolded from their parents at the time of a junior high school student were asked to carry out the free reply of the most disagreeable way of being scolded in their experiences.

As a result, seven categories of the disagreeable way of being scolded were found.

These categories were as follows: "the tedious way of scolding", "the scolding as compared with the others", "one-sided denial", "the way of scolding emotionally and parent sided", "the indirect way of scolding", "the injunctive way of scolding", and "disregarding children."

The effective tentative plan of a way to scold was shown based on these results, and this paper examined validity from the viewpoint of learning theory and counseling theory about them.

Key word: way of scolding, children, students, learning theory, client-centered therapy

### [ 要約 ]

青少年による犯罪や問題行動の質的变化に応じて、昨今、大人が子どもの行為を大目にみがかちな傾向を反省し、子どもを叱ることの必要性を再認識する声が強くなっている。

そこで、今後必要になるであろう効果的な子どもの叱り方を探るために、学生を対象とした調査を行った。170名の大学生（短大生を含む）に中学生時の親からの叱られ体験のなかで、もっとも嫌な叱られ方を自由回答させるという方法をとった。

その結果、嫌な叱られ方は「くどい叱り方」、「他者と比較して叱る」、「一方的否定」、「感情的・親都合優先の叱り方」、「遠まわしな叱り方」、「命令的な叱り方」、「子ども軽視」の7つのカテゴリーに分類された。

本稿ではこれらの結果をもとに効果的な叱り方の試案を提示し、それらについて学習理論とカウンセリング理論の視点から、有効性の検討を行った。

キーワード：叱り方 子ども 大学生 学習理論 カウンセリング理論

## はじめに

昨今家庭の教育力の低下が問題視されている。小学校を中心に頻発している「学級が正常に機能しない状態（いわゆる学級崩壊）」の原因も就学前の家庭での教育（しつけ）段階における忍耐学習不足にあるのではという見方もある。

また、少年による凶悪犯罪の頻発に対して、家庭や地域による青少年の教育を再認識する声も増加している。例えば、東京都は平成 12 年に起こった少年によるホームレス傷害致死事件の発生を受けて、生活指導の徹底を求める通知<sup>1)</sup>を出した。その中で、学校教育全体を通した心の教育の推進や学校における生活指導體制の確立など、学校教育の指導徹底をはかると同時に、生徒の家庭へ家庭教育の重要性を求めることが記されている。ここでは、家庭がしつけるべきことはきちんとしつけ、親と大人が責任をもって社会のルールを伝える、叱るべき時はきちんと叱ることを求めている。叱りに関しては「子どもを叱らない、大目に見るといった許容的な風潮が社会に蔓延し、かえって子どもたちの発育を阻害し、耐える力や規範意識の低下等を招いている現実にも目を向け、時には他人の子どもでも叱る必要がある」と指摘している。

このように、親や大人が子どもを叱らなくなったことへの反省が社会的に高まっており、教師にも必要に応じて子どもを叱る熱意と責任の再認識を求める声も出てきている。<sup>2)</sup>

### 1. 目的

このように親を中心とする大人が子どもを叱る必要性の高まりに応じて、効果的な叱り方に関する知見が必要になってくると思われる。

これまでの「叱り」に関する研究として、遠藤ら（1991）<sup>3)</sup>は小学生と大学生を対象に親の叱り方のパターンを調べ、直接的表現による叱りと間接的表現による叱り、および罰の執行（なぐる、ける）に分類している。大学生には小学生の頃に親から叱られたことを思い出して回答させている。そして、小学生と大学生の結果を比較し、罰の予告（言う通りにしないと罰を与えるという予告）や子どもの人格に対する評価、罰の執行という叱り方が長期にわたって記憶に残っていることを指摘している。竹内（1995）<sup>4)</sup>は教師による叱りを子どもはどのように感じているかを調べた。そのなかで、教師による厳しい叱りは、教師に対する悪い感情をもたらすという結果を得ている。

また、田村・石川（1998）<sup>5)</sup>は小学校 4 年生から 6 年生 1791 名を対象に両親からの叱られ体験やほめられ体験などについて質問紙調査を実施している。ここでは、叱られる理由や叱り方、ほめ方を父母別に検討している。

これらの調査研究では、「どのような時に親から叱られるか」、「叱りの程度は場合によってどのように違うか」、「口頭での叱りか暴力をとまなうものか」などについて、子どもと親を対象に問うものがほとんどである。

実際に子どもを叱る場合には、叱りを子どもがどのように受けとるかという叱りの認知的な側面が重要であり、子どもに認知された叱りこそが子どもに影響を及ぼすと考えられる。

しかし、これまでに実施されてきた叱り調査研究にはこのような視点から行われたものがほとんど見当たらない。そこで、本稿では子どもに嫌だと認知された叱り方の特徴を見出すことを通して、実践的に効果のある叱り方を提案することを目的としたい。

## 2. 方法

上記のような目的のために次のようなアンケート調査を実施した。なお、今回実施したのは、今後数量的分析を行うための項目を探ることも目的としている。

### 2.1. 調査対象

大学生、短期大学生計 170 名。内訳は本学 47 名、私立 A 大学理学部の教職課程履修学生（2 年生）55 名、私立 B 短期大学学生 68 名であり、いずれも首都圏に所在する。

なお、留学生は生育環境（文化）の違いによる影響を避けるために今回の対象者とはしなかった。

表 1. 対象者数

大 学	男性	女性	計
本 学	29	18	47
A 大学	24	31	55
B 短大	0	68	68
計	53	117	170

### 2.2. 調査内容

質問項目は次の 2 問。あなたが中学生くらいの頃、親から、どんな言われ方（叱る、注意、説明すべて含む）をされるのが、いちばん嫌でしたか？ もし、親から叱られるとしたら、どんな叱られ方がよかったですか？

これらの質問に対して自由回答とした。中学生時を思い出して回答させる方法は、遠藤ら（1991）が用いたものと基本的には同様であるが、親からの叱りをどのように感じたか（認知したか）を中心に問うているところが異なる。

### 2.3. 調査実施

各大学で著者が担当する授業時に調査を実施した。授業は本学「現代心理学」、A 大学「教育心理学」、B 短大「性格心理学」である。いずれも、授業中に特に制限時間を定めず回答させた。

## 3. 結果

アンケート回答を対象集団別に概観したところ、集団による差はほとんどみられなかった。3 つの集団は、4 年制大学生と短大生、理科系専攻と文科系専攻、そして入学時点での偏差値にもそれぞれ差があるが、男女も含めて回答内容の集団による偏りは認められなかったの

で、全回答者をまとめて集計した。

### 3.1. 嫌な叱られ方の結果

なお、回答は「いちばん嫌だったもの」を求めていたが、複数回答をした回答者も少数いた。それらの回答はすべて1票として集計した（したがって、得られた回答数は対象者の人数を上回る）。

また、アンケート質問は叱りに限定するものではないが、回答の大半は叱りに関するものであった。表2に叱りに関する回答をKJ法整理した結果を示す。

表2. 嫌な叱られ方

#### 1) くどい叱り方

- ・くどくど、しつこく叱る(40)
- ・今怒っていること以外のことをもち出す(3)
- ・細かいところまで怒る(2)

#### 2) 他者と比較して叱る

- ・きょうだいと比較される(18)
- ・他の子と比較される(16)
- ・『私の若い頃は～だったよ』(2)

#### 3) 一方的否定

- ・言い分をきかず頭ごなしに悪いと決めつける(16)
- ・とことん否定される(4)
- ・ダメな所しか言わない(1)
- ・いくら頑張ってもほめてもらえない(1)
- ・性格を直せと言われる(1)
- ・こっちの話をきかず押しつける(3)
- ・一生懸命伝えているのに、へりくつだと否定される(2)
- ・無視する(4)
- ・こっちの話をきいていないのでポイントがずれている(1)

#### 4) 感情的・親都合優先の叱り方

- ・どなる(7)
- ・やかましい・うるさい(4)
- ・親の気分で怒る(10)
- ・泣く(2)
- ・自分のことを棚にあげる(3)

#### 5) 遠まわしな叱り方

- ・いやみったらしく言う(10)
- ・遠まわしに言う(5)

#### 6) 命令的な叱り方

- ・命令口調で言う(3)
- ・『親に養ってもらっているうちは勝手なことをするな』と言う(1)
- ・『あなたのためにしてあげているのに何でわからないの』と言う(2)

#### 7) 子ども軽視

- ・子ども扱い(3)
- ・バカにする(3)

#### 8) その他

- ・常識をもち出して言う(2)
- ・後から言う(2)
- ・『女の子なんだから...』という叱り方(4)
- ・『ウチはウチでヨソは関係ない』と言う(3)
- ・『買ってやったのに、なぜ～しない』(1)
- ・『今のうちに～やっておきなさい』(1)

( )内は票数

表2はカテゴリー別に票数の多いものから並べたものである。カテゴリーとしては7つが見出された。最も票数の多い第1カテゴリーは「くだい叱り方」であり、この叱り方の基本的特徴は時間的長さである。中には「ようやく終わったかと思ったら、次の日も同じ叱りが続いた」という回答もあった。また、「『だから...』『やっぱり...』をつけて次々に別の話を持ち出してくる」や「叱る時に高校や大学と、先のことまで言ってくる」もここに含めた。

第2カテゴリーは「他者と比較して叱る」で、兄弟姉妹の中の他者を引き合いに出して本人の非を叱る、あるいは『 さんはちゃんとしているのに...』という相対評価をする叱り方である。親自身が自分の若い頃を引き合いに出すものも他者との比較とした。

第3カテゴリーは「一方的否定」。親が子どもの弁解や説明を受け付けず、全面的に子どもの非を責めるパターンである。性格そのものの否定といった極端なものもある。そして、あまりにも決めつけているため「(話や叱りの)ポイントがずれている」場合もあるようである。

次に「感情的・親都合優先の叱り方」を第4カテゴリーとした。「怒鳴る」、「ガミガミうるさく言う」などであり、しかも子どもからみれば多分に気分左右された叱りのようである。子どもからすれば親の自分勝手な叱りであると認知されていることがうかがわれる。その意味で、「自分のことを棚に上げて叱る」もこのカテゴリーとした。

第5カテゴリーは叱りたいことを直接叱るのではなく、例えば『～やってくれたらお母さん助かるのになあ』と婉曲に批難する叱り方であり、「遠まわしな叱り方」とのカテゴリー名とした。

第6カテゴリー「命令的な叱り方」と第7カテゴリー「子ども軽視」は同票数であった。「命令的な叱り方」は親から子どもへの一方向性という点では第3カテゴリー「一方的否定」と同様であるが、内容が一方的指示である点が異なる。親からの恩の押しつけというものもここに含めた。「子ども軽視」は中学生(設問の設定は中学生時代としている)であるにもかかわらず、子どもを独立した存在として認めない扱いをするものである。したがって、親の態度としては「(子どもを)バカにする」ことになる。

「その他」では『女の子なんだから...』といったジェンダーに関するものの票数が多い。

また、叱り方以外では、「悩んでいる時に『悩むな!』『気にするな!』と言う」、「表情のない声で言う」、「心配しすぎ」、「深刻な言い方をする」といった回答があった(すべて1票ずつ)。これら以外はすべて叱りに関する回答であった。

### 3.2. 「どんな叱られ方がよかったか」集計結果

当然ともいえるが、「もし親から叱られるとしたらどんな叱られ方がよかったか」という設問には、「嫌だった叱られ方」の反対のものが大部分を占める。

回答を整理すると表3のようになる。

表3. どんな叱られ方がよかったか

---

短時間で(34)
叱る理由を明示して(28)
こちら(子ども)の言い分を聞いてから(27)
怒鳴らないで冷静に(18)
他者と比較しないで(8)
直接的に(7)
良いところを認めながら叱る(7)
どうすればよいかを示した叱り方(7)
叱る原因となっているものだけを叱る(5)
自分のすべてを否定しないで(2)
説得するように叱る(2)

---

( )内は票数

叱られ方として好ましいとされた第1位は「短時間で叱る」である。これは嫌な叱られ方(表2)の第1カテゴリーに対応するものであり、「くりかえさず一言で叱って欲しい」、「怒鳴られてもいいからきっぱりと済ませて欲しい」、「後くされない叱り方」などが代表的な回答である。中には「一発ビンタされてお終いにしたい」というものもあった。長時間叱られるくらいならば、殴られたほうがましという意味であり、「くどい叱り方」をいかに嫌っているかを裏付けるものともいえそうである。

なお、第7位「叱る原因となっているものだけを叱って欲しい」も心性としては、これとほぼ同様と思われる。

第2位と第3位はほぼ同数で続く。「叱る理由を明示して叱って欲しい」が第2位であるということは、それだけ子どもにとって叱られる理由がわからずに叱られていることが多いことを示すものであり、嫌な叱られ方(表2)の第3カテゴリー「一方的否定」に対応するものと思われる。また、第4位の「怒鳴らないで冷静に叱って欲しい」にも、この理由明示希望がこめられていると受けとれる。

第3位の「子どもの言い分を聞いてから叱る」も「一方的否定」の叱り方を嫌うことから発せられたもので、親からの一方的な叱りへの拒否感の強さが表れているのではないだろうか。「子どもは子どもなりに考えているのだから、もっと聞いて欲しい」という回答が子ど

もの気持ちをもっとも良く代弁していると思われる。

第5位の「他者と比較しないで叱って欲しい」と第6位の「直接的に叱って欲しい」、は、それぞれ嫌な叱られ方（表2）の第2カテゴリー「他者と比較して叱る」と第5カテゴリー「遠まわしな叱り方」に単純に対応しており、第6位「良いところを認めながら叱って欲しい」と第8位「自分のすべてを否定しないで叱って欲しい」は第3カテゴリー「一方的否定」の一部に応じたものと考えられる。

#### 4. 考察

まず、今回の調査回答は、大学生が過去（中学生時代）を振り返って想起した記憶であるという点が最大の特徴である（もちろん記憶錯誤のため小学生時代の記憶も混ざっているかもしれないが）。小中学生を対象とした同類の調査では、今まさに叱られている現状についての報告や感想が述べられるが、本調査はそうではない。今回の調査対象は大学（短大）1年生と2年生で占められているので、回答は中学時代から平均して6～7年という時間経過を経ても印象に残っている叱られ方ということになる。

つまり、今回の調査で示された「嫌な叱られ方」は、“今でも覚えているほど嫌だと認知した叱られ方”と表現することができる。中学生という思春期の子どもに後々までも影響する叱り方が報告されているともいえる。

そして、「どんな叱られ方がよかったか」に示されたものが、ほぼすべて「嫌な叱られ方」の反対の行動であることから、「嫌な叱られ方」として列挙された叱り方は、叱責という罰を与えることで不適切な行動を修正しようとする目的は果たせなかった叱り方なのである。効果のない叱り方といってもさしつかえないであろう。

##### 4.1. 効果的な叱り方

本稿の目的は、今後親を中心に地域社会で大人が子どもを叱る必要性が高まるであろうことを前提に、大人は子どもをどのように叱ればよいのか、効果のある叱り方を探ることにあつる。その目的に応じて、調査結果からごく単純に叱り方のポイントを列挙するならば、以下のようになるであろう。

表4. 調査結果から考えられる効果的な叱り方

- 
- 1) くどくど叱らず短時間で叱る
  - 2) 他者と比較して叱らない
  - 3) なぜ叱るのかを明確にして叱る
  - 4) 子どもの言い分も聞き、頭ごなしに子どもを否定しない
  - 5) 問題の原因となったものだけを叱り、余計なことは叱らない
  - 6) 持って回った言い方は避け、直接的に叱る
  - 7) 感情的にならず穏やかに叱る
-

ここで、表4に示した叱り方が理論的にも支援できるか否かを検討してみたい。なぜならば、叱られ体験者（学生）の認知的、時間的フィルターを通過して抽出された知見をもとにした叱り方案が、理論的にも妥当なものであると判断できるならば、実践に供する際の安全性が期待できるからである。

検討に使用する理論的枠組みとしては、叱りが不適切行動の変容を目的とすることと、叱りは、叱る者（大人）と叱られる者（子ども）との間の人間関係であるととらえられる点から、スキナー（B.F.Skinner）による学習理論であるオペラント条件づけ理論に基づく行動修正とロジャーズ（C.R.Rogers）の創始によるクライエント中心療法（カウンセリング）を使用することとする。

#### 4.2. 行動修正の視点からの考察

まず、表4の1) 2) 3) 5) 6) は行動修正の視点から考察できそうである。これらに共通するのは、叱りの対象となる不適切な行動を特定し、その行動だけに罰（言語的罰）を与え、その行動の生起頻度を低減させる働きにある。例えば2) 他者と比較して叱らない、は不適切な行動の基準は絶対的なものであり、どのような場面であろうが特定の行動が生じたときは必ず罰が与えられる（叱られる）ことになる。また、5) 問題の原因となったものだけを叱り、余計なことは叱らない、の「余計なこと」には不適切ではない行動も含まれる可能性があり、不適切な行動と不適切ではない行動を同時に罰することによる混乱を避ける意味がある。

これによって三項随伴性（どのような刺激のもとで、どのように反応すれば強化されるかという関係性）を確立できることになるので、それらの叱り方は不適切行動の修正をもたらすことができるのである。ただし、行動修正では不適切行動の消去と同時に適切な行動が起こったときの強化も不可欠であり、叱るだけではなく「ほめる」ことも同時に考慮する必要がある。

#### 4.3. カウンセリングの視点からの考察

大人（親や教師）が子どもを叱るのは、子どもの間違った行動や不適切な行動を改めさせ、正しい行動を身につけさせたいからに他ならない。

この際、理想的なのは叱りによって子どもが自らの間違いや不適切な行動に素早く気づき、即正しい行動に変えてくれることであるが、実際にはそう簡単には事が運ばず、子どもがなかなか気づかないために、つくどくど叱ったり、他者を引き合いに出してしまったり、ついには感情的になってしまう。そして、一方的な叱りに至ってしまうことになる。

ロジャーズの理論は「人間は本来自ら成長しようとする力をもっており、自分の問題については自分が最もよく知っている」という人間観を基盤としている。<sup>6)</sup>したがって、問題を解決するのはカウンセラーではなくクライエント自らであり、カウンセラーはクライエントを支持し、“良くなるようとする力”を引き出すことが役目であると考えられている。これをカウンセリングとして構築したものがクライエント中心療法である。

クライエント中心療法においてロジャーズが指摘する基本的態度は、「クライエントに対する無条件で積極的な関心」、「共感的理解」、「純粋性」の3つであり、カウンセラーはクラ



イベントの話に傾聴することが重要となる。

表4の4)子どもの言い分も聞き、頭ごなしに子どもを否定しない、はまさにクライエント中心療法の基本的態度に合致する。そして、ロジャーズの人間観にしたがえば、子どもは言い分を話す過程で、自らの気持ちや考えを整理でき、自分の間違いや不適切な行動といった問題点に気づいていくことになる。

子ども自身に“気づき”が起これば、穏やかに叱る(表4の7)だけで十分な効果が期待できるであろう。

以上、表4に提示した叱り方を2つの理論に照らし合わせて検討してきたが、どうやらこれら7つの叱り方は理論的枠組みでも説明可能なようである。もちろん、実践に供しながら工夫を加えていく必要はあるが、少なくとも実践で試してみる価値は十分にあると思われる。

## 5. まとめ

本稿では叱り方試案を提示することができた。しかし、冒頭でもふれたように、「叱り」に関する学術的研究は他のテーマに較べて多くない。例えば、北海道大学菱谷研究室が提供している学会研究雑誌データベース(注1)および信州大学守一雄研究室提供のデータベース(注2)を利用して、心理学研究(日本心理学会論文誌)と教育心理学研究(日本教育心理学会論文誌)に掲載された論文タイトルに「叱り」やそれに類する単語が含まれるものをキーワード検索したところ、心理学研究には1編もなく、教育心理学研究では遠藤ら(1991)の1編のみであった。

教育関係の書籍や雑誌には「叱り」や「叱り方」をテーマとするものが散見されるが、データベース検索でみる限りは心理学畑の「叱り」に関する学術的研究は非常に少ないといえる。

なぜ少ないのか、理由はよくわからないが、社会的状況が「叱り」を求めつつある現在、心理学分野から「叱り研究」を行う価値と意味はありそうである。ただし、「叱り」だけではなく、「ほめる」ことの効果や「叱り」と「ほめ」の相互作用等も併せて研究対象とすることが重要であると思われる。

また、本稿で行った研究は、いわば試験的“当たりづけ”的なものであり、得られた知見を基にして今後数量的な分析を行い、叱りの認知構造を探っていきたい。

注1) <http://www.psych.let.hokudai.ac.jp/hubs/hisi-lab/imagery/sub/database.html>

このデータベースには心理学研究(1976年~2002年4月号)、教育心理学研究(1976年~1998年)が収録されている。

注2) <http://zenkoji.shinshu-u.ac.jp/mori/kr/krhp-j.html>

教育心理学研究(1995年~2001年第2号)が収録されている。

#### 引用文献

- 1) 東京都教育庁、「学校内外における生活指導の徹底について(通知)」, 2002.
- 2) 上地安昭、「子どもを『叱る』教師の熱意と責任」, 『月刊生徒指導』, 第33巻(14号), 学事出版, 3-5, 2003.
- 3) 遠藤由美・吉川左紀子・三宮真智子、「親の叱りことばの表現に関する研究」, 『教育心理学研究』, 39巻, 85-91, 1991.
- 4) 竹内史宗、「子どもは『叱り』をどのように感じているか」, 『教育心理学年報』, 34巻, 143-149, 1995.
- 5) 田村毅・石川洋子、「調査レポートほめられ体験・叱られ体験」, 『モノグラフ・小学生ナウ』, 18巻(3号) ベネッセコーポレーション, 1998.
- 6) Rogers, C.R. (伊東博 編訳), 『パーソナリティ理論(ロージャズ全集8)』, 岩崎学術出版社, 1951.

#### 参考文献

- 三川俊樹、「子どものほめ方叱り方」, 日本教育新聞社, 2000.
- ベネッセコーポレーション、「ほめ方・しかり方」, 『モノグラフ・小学生ナウ』, 12巻(2), 1992.
- 今田寛, 『学習の心理学(現代心理学シリーズ3)』, 培風館, 1996.